

第一章 主権者または国家の支出（二）

第一部 国防の支出（二）

信頼できる史料に裏づけられる常備軍の初期例の一つとして、マケドニア王フィリッポスの軍が挙げられる。彼はトラキア、イリュリア、テッサリア、さらにマケドニア周辺のギリシャ諸都市とのたび重なる戦いを通じ、もとは民兵だった兵を常備軍としての厳格な規律のもとに再編し、鍛え上げた。平時はそもそも稀で、あっても短く、その間も軍を解散せず維持し続けた。この軍は長期の激戦の末、古代ギリシャの主要都市国家の勇敢で鍛えられた民兵を打ち破り、さらにペルシア帝国の脆弱で訓練不足の民兵を、ほとんど抵抗なく屈服させた。ギリシャの都市国家とペルシア帝国の没落は、各種の民兵に対して常備軍が示した圧倒的で抗しがたい優位の帰結であり、これは人類史の歩みにおける最初の大きな転換として明確に記録されている。

第二は、カルタゴの滅亡と、それに伴うローマの台頭・隆盛である。両共和国の盛衰は、おおむね同じ要因に帰着したといえる。

第一ポエニ戦争の終結から第二ポエニ戦争の開戦に至るまで、カルタゴ軍は連戦に明

け暮れ、指揮権はハミルカルから娘婿のハスドルバル、さらに息子のハンニバルへと順次継承された。彼らはまず国内の奴隷反乱を鎮圧し、次にアフリカの離反勢力を再服属させ、最後にスペインの有力勢力を屈服させた。この過程で、ハンニバルがスペインからイタリアへと率いた軍勢は、度重なる戦闘を経て、常備軍としての厳格で緻密な訓練と規律を備えるに至ったとみられる。一方ローマは、完全な平和ではなかったにせよ、この時期に目立つ大規模戦はなく、軍紀の弛緩が広く指摘されていた。トレビア、トラシメヌス、カンナエでハンニバルが相対したローマ軍は民兵であり、対するカルタゴ軍は練度の高い常備軍であった。この編制と練度の差こそが、各会戦の帰趨を決定づけたと考えられる。

ハンニバルがスペインに残した常備軍も、迎え撃つローマの民兵を前に優勢を保ち、弟ハスドルバルの指揮の下、数年のうちに同地からローマ勢をほぼ一掃した。

しかしハンニバル軍は本国からの補給に乏しく、一方でローマの市民兵は常に戦場に置かれ、戦争が長引くほど訓練と規律の行き届いた常備軍へと鍛え上げられていった。その結果、ハンニバルの優勢は次第に薄れていく。ハスドルバルはスペインで麾下の常備軍の大半、あるいは全軍を率いてイタリアの兄を救援する決断を下したが、行軍途上

で案内役に誤って導かれ、不案内の地で自軍と同等かそれ以上の戦力を持つ敵常備軍の奇襲を受け、全面敗北を喫した。

ハスドルバルがスペインを離れると、大スキピオの前に残されたのは、自軍に劣る民兵だけとなった。大スキピオはこれを撃破して同地を平定し、戦いを重ねるなかで自軍の民兵も鍛え上げ、練度の高い常備軍へと育てた。やがてその常備軍はアフリカへ渡ったが、そこで対したのも結局は民兵にすぎなかった。カルタゴを守るには、もはやハンニバルの常備軍を本国へ呼び戻すはかなかった。しかも、度重なる敗北で士気の上がないアフリカの民兵が加えられた結果、ザマの会戦では民兵がハンニバル軍の大半を占めるに至った。その一日の勝敗が、宿敵たる二つの共和国の命運を決した。

第二次ポエニ戦争の終結から共和政の崩壊に至るまで、ローマ軍は一貫して常備軍として機能した。一方、マケドニアの常備軍は粘り強く、ローマの威勢が最盛であった時期でさえ、この小王国を屈服させるには二度の大戦と三度の大会戦を要した。もし最後の王がひるまず指揮を執っていれば、征服はさらに難航しただろう。文明諸国たるギリシャ、シリア、エジプトの民兵はローマの常備軍にほとんど太刀打ちできなかったが、「蛮族」と見なされた幾つかの国の民兵は健闘した。ミトリダテスが黒海・カスピ海以

北から集めたスキタイまたはタタール系の民兵は、第二次ポエニ戦争後にローマが直面した最強の敵であり、パルティアとゲルマン人の民兵も侮れず、しばしばローマ軍に大きな打撃を与えた。それでも、適切な指揮のもとではローマ軍の優位は明白で、ローマがパルティアやゲルマニアの最終的征服に踏み込まなかったのは、すでに巨大化した帝国に二つの蛮国を加える利益が乏しいと判断したからだろう。古代パルティアはスキタイまたはタタール系の出自とされ、そうした慣習を多く保持していたとみられる。古代ゲルマンも遊牧民で、平時から従っていた首長の下にそのまま集結して戦い、その民兵の編成はスキタイやタタールと同様で、出自もおそらく近縁だった。

ローマ軍の規律が緩んだ要因は多岐にわたるが、厳格さの行き過ぎ自体も一因だった。最盛期に外敵がほぼ姿を消すと、重装備は無用の重荷として棄てられ、苛烈な訓練も不要の負担と見なされて省かれた。帝政期には、とりわけゲルマニアとパンノニアの国境を守る常備軍が皇帝への脅威となり、しばしば自軍の将軍を擁立した。これを抑えるため、従来の「国境に軍団を集中させる体制」を改め、小部隊を属州の都市に分散駐屯させ、侵攻に備える場合以外は原則動かさない方針へ転じたと、史料はディオクレティアヌスまたはコンスタンティヌスの改革として伝える。商工業の町に長く駐屯した兵は、

やがて商人・職人・製造業者としても働くようになり、軍人としてより市民としての性格が強まった。その結果、常備軍は腐敗と怠慢に陥って規律を失い、西方から侵入してきたゲルマン人やスキタイ人の民兵に対して劣勢を余儀なくされるようになった。皇帝たちは当座、ある部族の民兵を雇って別の部族の民兵に当てることでしのぐほかなかった。古代史が具体的に示す人類史の大きな転換のうち、第三が西ローマ帝国の崩壊である。その背景には、文明国の民兵に対してはいわゆる野蛮社会の民兵が、農耕民や都市の職人・製造業者の民兵に対しては牧畜民の民兵が、抗しがたい優位を示した事実がある。一般に、民兵の勝利は常備軍に対してではなく、訓練や規律で劣る他の民兵に対して得られてきた。ギリシアの民兵がペルシアの民兵を破った戦い、後世にスイスの民兵がオーストリアやブルゴーニュの民兵を退けた戦いがその例である。

西ローマ帝国の崩壊後、その空白を埋める形で定着したゲルマン諸部族やスキタイ系諸民族は、当初は旧来の軍制を維持していた。牧畜や農耕に従事する人々から成る民兵は、平時は首長に従い、戦時にはそのもとに招集され、訓練と規律も一定の水準で保たれていた。だが、産業と技術の発展に伴って首長の権威は相対的に低下し、多くの人々は軍事訓練に割ける時間を次第に失っていった。結果として封建的な民兵の訓練と規律

は崩れ、代わって常備軍が徐々に整備されていく。そして一たびある文明国が常備軍を採用すると、安全保障上、近隣の文明国も追従せざるを得なくなった。従来の民兵では常備軍の攻勢に太刀打ちできず、自国の安全がその選択に懸かっていると悟ったからである。

常備軍の兵士は、実戦経験がなくとも古参兵に劣らぬ勇気を示し、いざ戦場に立てば最も熟練した兵とも互角に戦える。一七五六年にロシア軍がポーランドへ進軍した際、その勇猛さは、当時ヨーロッパで最も鍛えられていたプロイセン兵にも見劣りしなかった。なお当時のロシアでは、その前に約二十年の長い平和が続き、実戦経験のある兵はごくわずかだった。一七三九年にイングランドがスペインと戦端を開いたときも、およそ二十八年の平和が続いていたが、兵の勇氣は損なわれておらず、戦争最初の作戦で失敗に終わったカルタヘナ攻撃でも、むしろ際立った。長い平和が將軍の腕や勘を鈍らせることはあっても、規律の行き届いた常備軍が維持されている限り、兵の勇氣は失われない。

文明国が国防を民兵に委ねれば、隣接する非文明的勢力から常に征服や敗北の危険にさらされる。アジアの文明諸国がタタール人に幾度となく制圧された歴史は、非文明社

会の民兵のほうが文明国の民兵より優勢であることを物語っている。規律と統制の行き届いた常備軍は民兵より明らかに強く、しかもそうした軍は豊かで文明化した国においてこそ最良の状態で維持され、貧しく非文明的な隣国からの侵入や侵攻を退ける唯一の盾となる。ゆえに、諸国の文明は少なくとも長期的には、常備軍によってのみ支えられる。

文明国家を守り得るのは、よく整備された常備軍だけである。また、文明化の遅れた国や社会を短期間で相応の水準へ引き上げる役割も、常備軍は担う。常備軍は圧倒的な力で帝国の辺境や最果てにまで統治者の法を行き渡らせ、本来なら統治機構が成り立たない土地にも規律ある正規の統治を維持する。ピョートル一世の改革の多くは、行き着くところ規律ある常備軍の確立に支えられており、彼の諸施策や法令を実行・維持したのもこの軍だった。その後、帝国が得た秩序と国内の平穩の多くは、この軍の力に負うところが大きい。

共和政や共和主義を重んじる人びとは、常備軍を自由への脅威として警戒してきた。総司令官や主要将校の利害が憲政とその秩序の維持と一致しなければ、その懸念は現実となる。カエサルCaesarの常備軍はローマの共和政を覆し、クロムウェルCromwellの常備軍は長期議会

を武力で解散させた。だが、君主が統帥し、有力な貴族・名望家・地主層が指揮に参与し、文民権力の中枢が軍を統制する体制であれば、常備軍は自由の敵とはならず、むしろ自由を支えることさえある。常備軍が君主にもたらす安全は、近代のいくつかの共和国に見られた、市民の些末な行為にまで監視を広げて平穩を乱す厄介な猜疑を不要にする。他方、有力者の支えがあっても、執政者の安全が民衆の不滿のたびに揺らぎ、ささいな騒ぎが数時間で大きな政変へと発展しかねない国では、政権は体制への不平やささやきにまで手を伸ばし、抑圧と処罰のあらゆる権限を行使せざるを得ない。これに対して、社会に根付いた貴族層と規律の行き届いた常備軍の双方に支えられていると自覚する君主は、粗暴で根拠薄弱な放言めいた抗議にもほとんど動じず、地位への自信ゆえにそれらを許容して受け流すことができる。放縦すれすれの自由が許されるのは、規律ある常備軍が君主の安全を確かなものに行っている国に限られる。そうした国では、公共の安全の名のもとに、無礼で奔放な自由の発露にまで介入して抑え込む裁量を君主に与える必要はない。

統治者の第一の務めは、外部の独立勢力による暴力や不当な侵害から自らの社会を守ることだが、文明が進むほどそのための費用はしだいに膨らむ。かつては、軍備に要す

る費用を統治者が負担することは、平時はもちろん戦時でさえほとんどなかった。だが、諸改良の進展に伴い、まず戦時に公費での維持が不可欠となり、やがて平時にも常備化して維持することが求められるに至った。

火器の発明は戦争術を大きく変え、平時の常備軍の訓練・規律維持費と、戦時の運用費の双方を押し上げた。主因は武器弾薬の高コスト化にある。マスケット銃は投槍や弓矢より高価で、大砲や迫撃砲もバリスタやカタパルトに比べて維持・運用の費用がかさむ。訓練や観閲で消費される火薬や弾薬は回収できず、消耗がそのまま出費になるが、

古代の観閲で投げたり射った投槍や矢は容易に回収でき、そもその価値も小さかった。さらに大砲や迫撃砲は著しく重く、戦場での準備だけでなく運搬にも多大な費用を要する。近代以降の火砲の威力は古代兵器をはるかに上回り、優勢な砲火に数週間耐え得る城郭や都市を築いて要塞化するのは難しく、費用も膨らむ。現代では、防衛費を押し上げる要因が幾重にも重なっている。不可避の技術改良に、火薬の発明による戦争術の大転換が重なり、負担は一段と増した。

現代の戦争では、銃火器の調達と運用に莫大な費用がかかり、その負担に耐えうる国ほど優位を確保しやすい。結果として、富裕で文明的な国は貧しく野蛮な国に対して優

越しやすい。古代には、富裕で文明的な国ほど貧しく野蛮な諸国からの攻撃を防ぎにくく、自衛に苦勞したが、今日ではむしろ貧しく野蛮な側のほうが、富裕で文明的な側に対する防衛の維持が難しい。一見有害に思われる銃火器の発明も、実際には文明の存続と拡大に確かな寄与をしてきた。